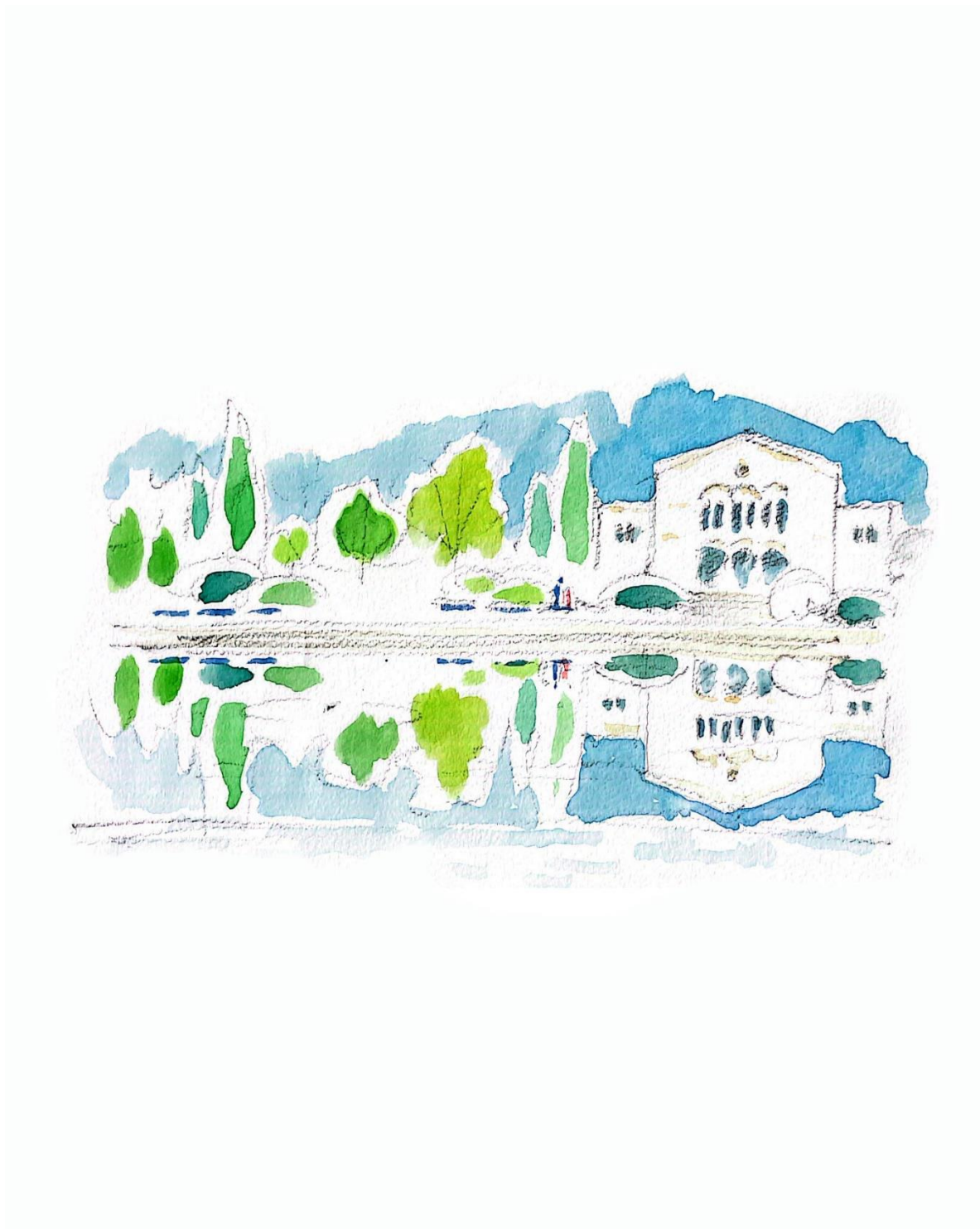


Love is knowing we can be
いつの日か、2人は恋人

注釈

桂 圭
Kei Katsura



注（構成）

この小説は、3章が重なり合うように構成されている。
それぞれの章は、春から夏そして秋から冬と変遷する。

第1章は、「この世」の話。高校一年生の初恋から学生結婚そして大学卒業直前の離別までの話を、主人公（彼）が語る。詩は、John Lennon の「Love」。
背景の曲は、Elvis Presley の「Can't help falling in love」。

第2章は、「あの世」から第1章を読んだ既に他界した恋人が、主人公に自分の心を語る手紙。詩は、Edgar Allan Poe の「Song」。
背景の曲は、Michel Legrand の「The windmills of your mind」。

第3章は、「仮の世」のブータンでの再会。恋人は小鳥（シジュウカラ）となって「あの世」から「この世」を仮訪問する。ふたりは、ブータンの友人と人間哲学と宇宙を語り、ブータンの山小屋で酔生夢死を過ごす。
詩は、主人公作の「雨」。
背景の曲は、Frederic Chopin の「Nocturne No.20 C-Sharp Minor」。

注（思想）

この小説は、パンスペルミア説（「宇宙汎種説」）を生命存在の前提にしている。この説は「生命は地球で自然発生したものでなく、途方もない遠い昔、とある時、宇宙で誕生し宇宙に拡がった。それが、宇宙空間に無限にある惑星の一つの地球にも降りてきた。生命は宇宙に溢れている。宇宙は生命の為にある」という考え。この「パンスペルミア説」の対極にあるのが、「自然発生説」である。すべての人と言っていいくらい、世界中の人々が、「自然発生説」を正しいと思い込んでいる。この論争は、ギリシャ時代から続いている。しかし、紀元前4世紀のアリストテレス以降は、科学でなく、力によって「自然発生説」が正しいとされ、今日に至っている。さて、この議論はどちらでもいいと思うかもしれないが、天動説でなく地動説が正しかったという発見以上に、人間の生活を決定的に変える。

「自然発生説」が正しいとなれば、「近代西洋哲学」が至った「人間中心主義」が是となる。一方の「パンスペルミア説」が正しいとなると、ベーダ思想の根底にある「生命平等」の思想が科学的に正しいということにより是となる。「人間中心主義」は人間の自己都合（wishful thinking）による誤解となる。ちなみに、「自然発生説」は、すでに1861年にフランスのルイ・パスツールの白鳥の首フラスコ実験によって否定されている。「パンスペルミア説」については、1981年にイギリスのサー・フレッド・ホイルとチャンドラ・ウィックラマシングの星間塵モデルと生物モデルの赤外線スペクトルによる一致観察によって証明された。

この小説の時代は、日本が、デカルトを起点とする「時間とモノ崇拝」である「近代西洋哲学」を何の疑いもなく邁進信奉していた時である。その現代世界の思潮に疑問を投げかける。「近代西洋哲学」による「自

然支配」と「科学技術崇拜」がもたらした世界は、結果的に、人間の生命維持が不可能となる放射性物質(世界の海水1リッター当たり1,000ベクレル)に汚染された地球である。まだこの事実は一般化していない。しかし、この知識が普及すると、人々は、否応なく死を身近な問題として意識するようになる。その結果、世界は、死から生を考える「不死の思想」を持つ東洋思想に傾く。

「近代西洋哲学」の究極は、決して得られることのない「不死の思想」の追求である。しかし、これは人間が独立を果たしたと思っているシュメール的「神」の領域である。「近代西洋哲学」は、人間がそのシュメール的「神」からの独立を宣言するだけでなく、その領域に入ることを志向する。東洋思想(仏法)は、「不死の思想」に基本的諦念を持ち、「死」を受け入れる。事実、人間には必ず公平に「死」が訪れる。「永遠の愛」は、唯一、人間に与えられる「魂の不死」である。人間はここで初めて、無限の昔に生命を造った創造主的「神」に触れる。

現代人(ホモ・サピエンス)が「言語(ロゴス)」を獲得したのは、約7万年~5万年前と言われている。この能力の獲得は如何なる進化論(選択の必然性・合理性が存在しない)をもっても説明できない。科学的には、自然選択でも突然変異でもなく遺伝子組み換えによるしか達成できない能力(フランシス・クリックの意図的パンスペルミア説)である。それほど大きな遺伝ジャンプである。言語能力の獲得によって人間は文明を築いたかもしれないが、生命継続という生命目的からは遠ざかった可能性がある。「言語」なしでネアンデルタール人は約60万年生存した。チンパンジーは500万年程前から言語なしで(言語を持たないから)存在している。ホモ・サピエンスはまだ20万年から30万年しか生命継続していない。では、何の為の言語能力なのであろうか。絶対意思(宇宙意思)=生命目的=生命継続に不必要どころか邪魔になる能力を何故獲得したのだろうか? 「人間中心主義」にとって「言語」は、人間の生命目的が他の下等生物と同じということは耐えられなく屈辱であるその事実(生命目的が生命継続に過ぎない)を自分から隠蔽する為の能力か。

この事実の宣言を「いつの日か、ふたりは恋人」の最後の「言語」として、ふたりは鳥「言語」で一言「クックッ」と共鳴して「この世」から太陽(「あの世」)に向かって飛び立っていく。

注(鳥言語)

鳥言語 (Avian Language)

ツピーツピー	(hello) 今日わ
ピユツピユツ	(yes) はい
ジイジイ	(no) いいえ
ルッルッ	(happy) うれしい
チュチュ	(satisfied) 満足
クックッ	(Dream) 夢
チュチュルッルッ	(I love you = satisfied + happy) 愛してる

注（第1章）

ギリシャの哲学者ヒポクラテス（紀元前 460 年頃～紀元前 370 年頃）、“生は短く、術は長い”。ローマの哲学者セネカ（紀元前 1 年頃～65 年）著、「生の短さについて」。

注（第2章）

『Song(1827 年)』原文 （Though を Now と読む）

I saw thee on thy bridal day-
When a burning blush came o'er thee,
Now （Though） happiness around thee lay,
The world all love before thee:

And in thine eye a kindling light
(Whatever it may be),
Was all on Earth my aching sight
Of Loveliness could see…….

That blush, perhaps, was a maiden shame-
As such it well may pass-
Now （Though） its glow hath raised a fiercer flame
In the breast of him, alas!

Who saw thee on that bridal day,
When that deep blush would come o'er thee,
Now （Though） happiness around thee lay,
The world all love before thee

『Song』の背景

詩人(Edgar Allan Poe)は、久しぶりに、テネシー州にある大学から故郷のバージニア州に戻った。そこで、故郷を離れる時に、結婚を約束した恋人(Sarah Elmira Royster)と再会した。が、それは、彼女の結婚披露宴だった。Sarah は、Edgar から何の便りもない(Sarah の父親がすべての手紙を棄てていた)ので、自分は忘れ去られたと思っていた。Sarah は、Alexander Shelton と知り合い、恋愛し、結婚することになった。何と、2 人の久しぶりの再会は、その結婚式のパーティーだった。Edgar と Sarah、2 人は動揺した。

ここからが詩の解釈となる。つまり、”Though its glow hath raised a fiercer flame In the breast of him, alas !
“の“him”それが誰なのか。この詩は詩人(Edgar)が語っている。“alas”とは、unfortunately(不幸にして)という

こと。だから詩人(Edgar)のことではない。したがって、“him”とは、Sarah の結婚相手の Alexander Shelton のことである。

その 20 年後 Alexander は若くして亡くなる。そして、Edgar は Sarah と再び婚約するが、Edgar の早死によって、2 人の恋が成就することはなかった(Edgar Allan Poe: 1809 年～1849 年)。

注 (第 3 章 “伝統・命令・自由放任”)

「経済学」は、人間が how to survive という視点から、生み出した「生存ルール」である。これまでに 3 つのルールが発明 (R・ヘールブロー) されている。先ず「伝統(tradition)」。これが最も長く存在しているルールで、狩猟採取漁労時代のもの。次に「命令(command)」。これは中央集権体制が確立した時のルール。王様の命令(初期王朝は背後にシュメール的「神」を祀った)を絶対のものとする。次はこの中央集権体制が崩壊(神聖ローマ帝国の崩壊による権利の分散)した後の時代のルール。「自由放任(*laissez faire*)」と言う。今の「生存ルール」は「自由放任」を前提とした「資本主義」。しかし、多くの問題を抱えた「生存ルール」であり、「第四のルール」が必要。現代の「資本主義」の問題は、その前提となっている「自由放任」が機能していないところにある。「自由放任」でなく限定 1%の「自由放任」の拡大が前提になっている。アダム・スミスの言う「神の見えざる手」による市場が機能していない独占を許す経済システムとなってしまった。1%の金持ちはますます富み、99%はさらに貧しくなる。まともな労働では生活ができなくなり、勤労に支えられる人間の尊厳がなくなる。そして、社会は病んでいく。how to survive の経済学が、how to rich the filthy rich となった。そして、地球上の富をほんの一握りの 1%が欲の限り独占していく限り、「第四の生存ルール」は、決して、生まれない。何故なら、社会の崩壊と戦争利潤の追求と使用済み核燃料による環境破壊によって、その前に人間がいなくなるから。

注 (第 3 章 “近代西洋哲学”)

BC2500 年～BC2000 年頃(中期青銅器時代)人類は、漸く、シュメール的「神」の支配から物理的・精神的に開放されと思える行動をとった形跡がみられる。人間独自の法律、哲学、宗教などが出現した。それから、1000 年ほどして (ギリシャ時代) 人類は、はじめて自分の「人間哲学」how to live を、生存をかけて本気で模索することになった。シュメール的「神」からの独立宣言と言える。それ故、この時期に「近代西洋哲学」のルーツと言われる、「ヘブライズム」と「ヘレニズム」の起点を求めることができる。

「ヘブライズム」は、BC14 世紀のモーゼの出エジプトから始まり、BC6 世紀のユダヤ教(旧約聖書)とキリスト教(新約聖書)を経て、13 世紀のトーマス・アクイナス、16 世紀のエラスムスの「スコラ哲学」となり、17 世紀のスピノザ、ライプニッツの「汎神論」に至る。この時代は、「人間の哲学」は、まだシュメール的「神」とその威光に強く惹かれている。

「ヘレニズム」は、BC8 世紀に、タレス、ヘラクレイトス、アリストタルコスなどの「イオニア(ミレトス)学派」と言われる人々による「自然哲学」を起点とする。「自然哲学」は、主に万物の起源は何かという宇宙における

人間存在の「外的視点」であった。宇宙における人間存在の「内的視点」の起点は、BC8世紀のホメロス、ヘシオドスにはじまり、BC5世紀のソクラテス、プラトン、アリストテレスの「ロゴス(言語、論理)」に受け継がれた。アレキサンドリア大王は、生涯にわたりアリストテレスの指導を受けた。その大王の東方遠征によってギリシャと古代オリエント(シュメール)の文化が融合し、「ヘレニズム」が生まれた。1世紀には、「人間の哲学」は、ローマのゼノン、セネカ、アウレリウスなどの「ストア派」に受け継がれた。

その1500年後に、シュメール的「神」に変わって誕生した人間が創造した人間的「神」の哲学である、「ヘブライズム」と「ヘレニズム」が結びついた(A・トインビー)。そして、17世紀に入って、イギリス経験論と大陸合理論の上に「近代西洋哲学」が生まれた。「近代西洋哲学」の父と言われるデカルトは「理性」を唱え、カントとヘーゲルがそれに続いた。続いて、ショウベンハウエルとニーチェは「意思」、ハイデッガーは「実存」を唱えた。ここに共通するのは、「科学信奉」である。科学がシュメール的「神」、そして人間的「神」に代わるものになり、ますます科学に対する信奉は不滅になった。「科学信奉」と合わせて「人間中心主義」と「地球中心主義」を賛美する文明を生み出したのは「近代西洋哲学」である。

このルーツは、ギリシャのアリストテレスにある。アリストテレスは、宇宙の中心に地球があるとした「天動説」を唱えた。更に、アリストテレスが唱えた、生命は地球の池から発生したとする「自然発生説」(仮説)は、いまだに根強く、生命発生論のセントラルドグマとして君臨している。しかし、19世紀には、ルイ・パスツールが、それを否定(生命は、生命からしか生まれない)した。そして、20世紀に入り、サー・フレッド・ホイルとチャンドラー・ウイクラマシンゲは、宇宙空間に生命は溢れているという「パンスペルミア説」を支える科学根拠を提示した。漸く、「ビッグバン」も「自然発生説」も否定される科学発見(特にジェームズ・ウェッブ天体望遠鏡導入後)が相次ぎ「パンスペルミア説」、そして「定常宇宙説」が正しいと認める科学者が多くなっている。サモアのアリスタルコスが、BC3世紀に、はじめて「パンスペルミア説」と「地動説(16世紀にコペルニクスも提唱)」を唱えてから約2300年になる。

第二次世界大戦に敗北した日本の戦後教育は、「西欧に追いつけ追い越せ」を大スローガンに、「科学信奉」と「米国信奉」を国民に植え付けた。特に主人公の時代は、それがすべてと言ってもいいくらい顕著であった。しかし、「科学信奉」の結果は、必然的に人間の「自然征服」に至る。そして主人公の時代には、成長の限界(ローマクラブの警告、マルサスの人口論)が大問題と指摘され、既に「環境汚染」という負の面が現実となっていた。日本の河川(琵琶湖の中性洗剤)や海(有明海のカドミウム)や世界の空の汚染(2,000回を超える大気圏内核実験の結果放射性物質の降下)が大きな社会問題となった。

環境汚染の中でも最も厄介なのは、この「放射性物質汚染」である。実は、これについては、ドイツの哲学者ハイデッガーがすでに指摘していた。人間の力では、原発・原爆によって作られた人工放射性物質を安全な物質に変えることができない。不可逆で後戻りができない。人間の知恵では回復不能な環境汚染である。既に世界では、10,000回を超える原発が稼働した。それによって生じた放射性物質(使用済み核燃料)は、他に経済的な選択がないので、いずれ海洋投棄されることになる。それは、人間の生存の許容量を超える(リッター当たり約1,000ベクレル)海洋汚染である。これが「近代西洋哲学」による「科学信奉」がたどり着いた終着点。人間が地球を住めないところにする、「近代西洋哲学」は、how to liveでなくhow to dieの指針だったと言える。

注（第3章 “不毛な議論”、“ドグマ”）

ツルゲーネフの「父と子」は、ロマノフ王朝崩壊後の「新旧思想」の相剋を描いている。ツルゲーネフの「永遠の和解」とは、「新旧思想」の融合のこと。同様にこの小説の背景は、日本の戦後思想の中の「新旧思想」の相剋である。

日本の縄文時代から江戸時代までの「倭国時代(中国傾倒)」の哲学を後進国思想として後ろに追いやり、先進国思想として「近代西洋哲学(欧米傾倒)」に、一切の迷いを毀積して、盲信的に邁進した日本の戦後思想に主人公の両親は生きている。主人公は、アメリカで育ったことから、両親のようにアメリカ人にへりくだることが一切なく、むしろ総じて余り出来の良くない同級生として、少し見下しているところがある。恋人はその経験がないため、無防備に天真爛漫に、戦後思想に立ち向かい挫折する。

主人公は、帰国子女であるから、両親の置かれた歴史座的な位相を理解できるが、「新旧思想」の相剋に翻弄されながらも、自分は“永遠の和解”に至る。「恋人」という男女の「愛」の形を否定し、それを素直に肯定できない主人公の両親は「近代西洋哲学」を信じたままこの世を去って行く。この物語(小説)は、そこから始まる。

日本の戦後哲学は、「Japanesey 哲学」で、「近代西洋哲学」から「ヘブライズム(キリスト思想)」を取り除き、「ヘレニズム」を伝統とする哲学に「神道」と少しばかりの「仏法」を無理矢理入れ込んだもの(梅原猛)である。そこには、狭い「愛」しかない。「儒教的」な「愛」。国家愛、社会(民族)愛、家族愛など、“すべてを捧げ尽くした愛(ツルゲーネフ「父と子」)”が語っているのは、男女の「愛」も含む広い「愛」。

デカルトが取り除いた「身体(肉)」とショウペンハウエルとニーチェが抹殺したシュメール的「神」に代わって、「魂」を残し、そこに儒教と美学を付け加えたのが「Japanesey 哲学」。主人公2人と主人公の両親との間にある不条理は、「新旧思想」の葛藤だが、より具体的には「Japanesey 哲学」と「愛」の葛藤である。

注（第3章 “生命目的は自己複製に過ぎない”）

「絶対意思(宇宙意思)」は、すべての生命(人間)がそのすべての細胞内に持っている DNA 上のゲノムコードのどこかに書いてある「生命目的」を規定する「ヒトゲノムコード」が存在するという仮説。そこに書かれているゲノムコード(遺伝子情報の条文)は、おそらく極めて単純で、すべての生命に共通するものに違いない。それは、全てに優先して、「自己複製」せよという「生命目的」にしたがった「生命継続」の指示と思われる。繰り返しになるが、人間を含むすべての生命の最優先の「生命目的」を規定・明示しているのが「絶対意思(宇宙意思)」。そして、その始動には外部エネルギーが必要である。つまり「絶対意思(宇宙意思)」＝「生命目的」＝「生命継続(自己複製)」は、DNA に内在しているが、その稼働には外部エネルギーを必要とする。真理とか理性とか意思の根源は DNA にある。

注（第3章 “輪廻”）

「輪廻」することは、再び生まれ変わり何か別の生命に宿って生きること。生きていること自体が「苦」だとする「仏法」では、回避しなくてはならない。「輪廻」から逃れる唯一の方法は、苦の原因である「自己」を消失（摺滅）することとなる。これを「悟り」と言う。「悟り」を開いて「輪廻」から逃れた人がお釈迦様のように「仏様」となる。パンスペルミア説の世界では、DNA/RNA が絶やさず複製され、宇宙空間に溢れ、生命は自動的に生死を繰り返す定常（steady state）にある。DNA は絶えることなく不滅。

注（第3章 “私はウイルス（人間≒ウイルス）”）

「私はウイルス」ということを、人間が、科学的に解明したのはごく最近のことである。2003年の「ヒトゲノム完全解読」以降である。人間は、この解明に、30万年以上の歳月を費やした。この解明がどれほどの大発見か。このことを認識している人は、まず、いない。

人間の基底にあるのは、「真理」とか「叡智」。人間誕生以来、ずっと、このように信じてきた。これが事実でない。となると、今まで積み上げてきた「人間哲学」がひっくり返ってしまう。これは、一大事。

事実は、人間の行動の基底にあるのは、「真理」とか「叡智」でなく、「ヒトゲノム^{注釈^a}」。そして、その「ヒトゲノム」の解読から推定されるのが、「私はウイルス」という仮定。何故なら、ヒトゲノムの半分以上にウイルスそのもの、そしてウイルスの足跡が認められるから。

ウイルスは、細胞に侵入して、そのエネルギー機構を乗っ取って、細胞を破壊して、「自己複製」という「生命目的」を実現する。そして、それを伝えるために生まれた。それがウイルスのレーゾンデートルである「生命目的」。

「私はウイルス」。これが事実となると、「ウイルス=人間」及び「細胞=地球」になる。ウイルスの「生命目的」は、結果的に、「自己複製（生命の継続）」のために細胞破壊すること。人間の「生命目的」は、「自己複製」のために地球破壊することとなる。細胞が無限にあるように、宇宙には、地球のような惑星も無限（M・マイヨール、D・ケロー）にある。

人間は、「私はウイルス」を、素直に受け入れることは、まずない。受け入れないよう必死に努める。滅亡するその日まで。しかし、人間の行動の基底にある、「ヒトゲノム」に逆らうことはできない。「生命目的」＝「自己複製」という単純な事実を見ないように、「言語」の美辞麗句にひたり、自分を騙して生きる。これが「人間パラドックス」である。

注釈^a

成人人間の細胞は、約60兆個ある。その一つ一つの細胞の中には核がある。その核内には46本(父から23本、母から23本)の染色体が内包されている。その染色体に書かれているのがヒトゲノム。それはヒト遺伝子情報(ヒト設計図)である。ヒトゲノムはモノとしていうとDNA(デオキシリボ核酸)であるが4つの塩基(G、C、A、T)の2つが対となって配列されている。GとCそしてAとTというように2つの塩基の対(30

億対)が連なっている。ヒトゲノムを一冊の本(100%)に例えると、ヒトの体を作るタンパク質を規定している機能遺伝子は2%位である。かつてヒトに侵入したが、やがてヒトゲノムの一部として内在化(共生して潜んでいる)したウイルスは約9%(HERVとLTR)である。その他ウイルス由来のものは約37%(LINE、SINE、DNAレトロトランスポゾン)。残りの52.5%は今のところは不明だがその半分ぐらいはウイルス由来と言われている。人間の細胞の核内にある、ヒト設計図の過半数(43%~70%)がウイルス由来となると、「ヒト=ウイルス」という仮説を立ててもおかしくない。ウイルスの「生命目的」は、自己複製だけである。ウイルスは、標的細胞に侵入してそのエネルギー機構をハイジャックして細胞を破壊して自己複製する。そして次の標的細胞の侵入を伺う。パンスペルミア説では、ウイルスは彗星に乗って宇宙空間の遺伝子の運搬も担っているが、基本は自己(DNAあるいはRNA)複製だけである。

注(第3章 “進化論”)

進化論と言えば、すぐ思い起こされるのがダーウィン進化論。しかし、この説はまだ科学的に証明されていない仮説であり、最新の科学的発見では、ほとんど否定されている。ダーウィン進化論は、地球上で、すべての共通の先祖から長い期間を経て自然選択(自然淘汰)を通して多種の生命が進化したというもの。しかし、これは絶えず新たな進化の材料が外から地球に入ってくるという開放系が前提とならなくてはならない。閉鎖系の惑星、地球、という前提のダーウィン進化論で、約5億数千万年前のカンブリア爆発のように、突如現在あるすべての動物の門が出揃ったという進化を説明することは困難。ダーウィン進化論は、遺伝子が、時間を経て、垂直的に進む進化論である。これに対し、外部から生命体の中に遺伝子が挿入または改変されるという水平進化論(ラマルクの獲得形質遺伝なども)がある。ウイルス(レトロウイルス)がまさにこれを行っている。自分の遺伝子を細胞に挿入することがあることが知られている。これをウイルスの内在化と言う。これは水平的に進む進化論である。これであれば、つまりウイルスが生命(細胞)に遺伝子挿入(ウイルス感染し細胞破壊した後)に細胞と共生するという戦略転換)することによって生命が多様化するという進化が考えられる。事実地球は、宇宙に対し開かれている。もし宇宙空間に生命が溢れていて、それが毎日地球に降り注いでいる(1日100トン、ウイルス個数は、年間 10^{22} 以上と推定)のであれば、地球に多様な生命が存在することに何の不思議もない。その場合、過酷な宇宙空間に生存するのに最も適している生命は、何も食べることなく半永久的に仮死状態で生存して、遺伝子を保存・挿入できるウイルスと言える。

注(第3章 “雨の詩”)

『雨の詩』 原文

空から雨が降ってくる。
いつもと同じ雨、なのに今日は不思議
雨が 耳元で囁くの。

私は 宇宙からきたって 彗星に乗って。
お空で お水の洋服つくってもらって 風に揺られて
降りてきたばかりだって。

ここはどこ？と聞くから
地球よ！と教えてあげた。
たくさんお友達つくって 早くお空に帰りたいって。

「雨の詩」の解説

この詩は、分かりやすく「パンスペルミア説」を解説したものである。

“空から雨が降ってくる”

雨の中心には氷晶核があり、それに水が付着している。その氷晶核は、宇宙¹から降って来た生命の胚種が入っている。その生命の胚種は太陽の周りを周回する彗星²が蒔いていったテールの塵に含まれている³。生命の胚種とは、凍結乾燥した細菌やウイルスや原虫や受精卵などが考えられる。それが彗星によって拡散され、宇宙空間に漂っている。彗星と地球の軌道が交叉する時、それらが地球に入り落下する。そして、生命の胚種の地球への旅が始まる。初めて大気圏に入るとき、少しショック⁴があって、それに耐えられない生命の胚種は絶える。生き残った胚種はその後ゆっくりと少しずつ数ヶ月⁵の地球大地への旅を開始する。そして最後の日に大気中の水⁶をからだにまもって（氷晶核となった生命胚種に水が付着して）雪となり雨となり大地に降る。だから雨も雪もただの水ではない。生命そのものである。

“たくさんお友達つくって”

これはダーウインの進化論を地球という閉鎖系から宇宙への開放系に拡大した考え。つまり、地球という狭い空間（閉鎖系）の限られた遺伝子による「突然変異と自然淘汰」ではなく、広大な多元宇宙（開放系）から地球空間に侵入する莫大な遺伝子による進化論を示す。そこで考えられるのは、生命胚種が宇宙空間に溢れているという考え（パンスペルミア説）である。ウイルスは、ウイルスだけでは自己複製ができないため、細胞を利用する。そのためにウイルスは細胞に侵入し、その中のミトコンドリアをハイジャックしてエネルギーを得て自己複製をする。このときウイルスは、非常に選択的。ウイルスは、選択した（された）標的細胞がいなくなるとエネルギー切れとなり自己複製ができなくなる。その時ウイルスは、標的細胞と共生（内在化）するという行動に出る。これがヒトのDNAの43%に内在するウイルス自体とウイルスの痕跡である。このようにしてウイルスが地球上の生命の進化にかかわってきたと考えられる。古生代カンブリア紀（5.42 億年～4.88 億年前）の生物の大爆発などは、閉鎖系のダーウインの進化論で説明することは困難であるが、宇宙塵を受け入れる地球とパンスペルミア説とウイルス進化論を組み合わせれば科学的な説明ができる。

注釈

1. 138±2億年前にできたとされる多元宇宙の一つのこの宇宙のこと。宇宙には数千億の銀河X千億以上の星（恒星）と惑星などが存在している。
2. 太陽系の中の1万～10万天文単位（1,496億kmX10⁴）先のオールトの雲には、1,000億個以上（ハレー彗星の大きさだと

2兆個以上)の彗星が存在している。

3. 彗星の中にもともと存在していた生命(凍結乾燥した細菌やウイルスや受精卵など)を彗星が太陽を周回するときに発酵などを通じてテールが形成され塵となって宇宙空間に残していく。
4. 最大で500°C(10気圧)位。細菌・ウイルスは主に数ミクロン(1/1,000ミリ)以下。
5. 彗星が歩いていった塵が地球の大気圏の中に入って地上に降りるまで。
6. 雨は、宇宙塵などが氷晶核をつくり、それに水分が付着して氷晶となったもの。

“早くお空に帰りたいって”

宇宙から降下してきた原始的な生物に、その後宇宙から次々と降下してきたウイルスによって様々な遺伝子が挿入され、生物が分化増殖していく(パンスペルミア説のウイルス進化論)。しかし、地球上の生物は、地球に留まらず宇宙に戻る。つまり、隕石が地球に衝突して地球の生物の遺伝子が宇宙空間に吹き飛ばされる(宇宙に戻る。R・E・リヒター)。ヒトは宇宙システムに従い、ヒト以外の生物は地球システムに従うことがDNAに規定されている可能性がある。ヒトは、地球という惑星の限られたエネルギーを早く消費する。生存に必要なエネルギー2,000kcal/日/人の25倍以上のエネルギーを使うのはヒトだけ。他の生命は、生存に必要なエネルギー以上を使うことはない。ヒトのDNAの中には、他の生命のDNAと異なり、自己増殖を早く行って、早く惑星破壊をして、早く宇宙に戻る、という遺伝コード(Life preference to universe. Genetic Element、宇宙選好遺伝子 Lu)が内包されている可能性があるという仮説。反対に、生存レベルのエネルギー消費に満足する生命(人間以外の全生命)の遺伝コードをLe(Life preference to earth)という(仮説)。

注(第3章 “ポール・ゴーギャンの問い”)

ポール・ゴーギャンがタヒチで描いた絵、「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか(1897年、タヒチ)」の問いは、漸く21世紀の科学(分子生物学と宇宙物理学)によって、「我々は宇宙から来た、我々はウイルスである、我々は宇宙に戻る」と解答される。しかし、「人間中心主義」が「言語」を駆使して、この解答の普及を邪魔する。このように、厳密科学でさえ事実が阻害される世の中であって、真実と真理の解明には、想像を絶する覚悟が要求される。